

第2回教育シンポジウム「リスク哲学、リスク経済学からみた医療制度」の開催に当たり
- 「人間への思いやりの医療」を目指して

<http://www.jsrmpm.org/Workshop/education2004.htm>

学会理事長 酒井亮二

表題のシンポジウムを10月10日に杏林大学医学部大学院講堂にて開催します。

人間の生存に不可欠な医療制度はそれを支える経済基盤が不可欠であり、他方医療を支える技術革新により日々増大する医療費を医療経済の最適化の視点から検討することが世界の共通する課題になっています。これを受けて、近年欧米では医療の経済最適化のためにどのような医療リスクマネジメントを構築すべきかが中心課題になり、活発な活動が展開されています。つまり、今日の医療経済学はリスクマネジメントを中心に理論と方法の開発がおこなわれています。

他方、社会システムとしての医療制度の根元には人間の生存哲学が基盤となっています。そのために、ヘルシンキ宣言、インフォ-ムドコンセント、リスクコミュニケーション、医師患者関係、患者の自己決定能力、終末医療、安楽死、法と倫理、尊厳死といったキーワードには「人間の尊厳」が共通する基盤になっています。そのために、安全な医療を考える上でも、「人間の尊厳」を基盤とすることが求められます。

「病を看取ることが自分自身を看取ると異なる」とする釈尊を重視した聖徳太子の意志を継ぎ、光明皇后が8世紀に慈悲の心をもって、悲田院(貧困による病人や孤児を住まわせてケアした社会事業施設) 施薬院(薬草を栽培して薬を調合し、貧窮の病人を診療し、無償で薬を施与する施設)を開きました。「貧困による病気に対して医療を展開する上で慈悲の精神」が根底に必要であることを日本では千年以上にわたり文化として保存して、日本人はそのような「医療における人間の尊厳」を長い間慣れ親しみ、それを空気のような存在のように当たり前と考えています。

近代の医療は科学を基盤としており、科学者の根底はアートであり、科学者は職人そのものです。従って、日本において安全な医療を展開する医療のア-ティストには、人間の尊厳として「慈悲の精神」をつねに検討する必要があります。

健康と生存にはリスクが常につきまといます。「人間の生存と行動に関する深い理解と考察」を怠ると、不注意、不心得、慢心による医療行為が発生します。中国におけるSARS対策のまずさが国際的な危機問題を引き起こしたことは、医療リスクマネジメントの根底として、21世紀の今日でも「人間の生存と行動に関する深い理解と考察」が強化される必要があります。

このような考え方から、人間の尊厳にもとづく医療制度、つまり「医療における人間への思いやり」を社会にどのように熟成するべきかを、本シンポジウムの目的にしました。21世紀のすぐれた生命科学と技術の根底には生命への深い思いやりが不可欠となっていると考え、それは広く討議すべき問題であるという考え方です。そのためには、皆様のご参加が不可欠であり、ご協力をよろしくお願い申し上げます。